
村の外れに住む悪魔

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

村の外れに住む悪魔

【Nコード】

N2818C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

村の外れには、悪魔が住んでいる。そんな悪魔に恋をする、みなしごの少女がいた。

村外れに立っている小屋には悪魔が住んでいる。みんなはそれを知っている。けれどもあたしだけが、本当の意味でそれを知っている。

今日もあたしはパンとぶどう酒を入れたバスケットを持って、小屋への道を歩いていった。

それがあたしの仕事だからだ。みなしごのあたしは、なかば生贄のような形で悪魔の世話を任されている。

悪魔の家は、森のそば。そこへ続く小道は木々に囲まれている。

あたしは目に入る木を数えながら毎日歩いている。

ちようど六十二本数えたところで、悪魔の小屋の前に着いた。今日もいつもと変わらない。

「ごーめーんーくーだーさーいー!」

木製のドアを力いっぱい叩きながら叫ぶ。悪魔はとても耳がいいのに、ちよつと呼んだくらいじゃ出て来ない。

「そんなに叩かなくても聞こえますよ」

そろそろ手が痛くなってきたとか、こんなに叩いたらドアが壊れるかともか思いはじめた頃、中から悪魔が顔を出した。これもいつものことだ。

悪魔は今日も色白だ。そして、髪は肌と対照的に黒くて、ぱさぱさしている。髪の隙間からは、尖った耳がのぞいている。

悪魔は丸めがねをかけている。レンズの向こうの双眸はアーモンドに似た形をしていて、血みたいに赤い。

優男だけど、年頃の女の子十人と会わせたらそのうち八人はひと目ぼれしちゃうだろうな、ってくらいにはかつこいい。

「さつさと出てこないのが悪いんでしょ。人にももの持ってきてもらつといて、なによ、その態度」

あたしは悪魔に指を突きつけた。

「えっと……その、ごめんなさい。あの、だから、そんなに怖い顔しないでくださいよう……。ねえ、リヴィエー又さん、せつかくのかわいい顔が台な……」

悪魔が全部言い終わる前に、両頬を同時に張ってやった。可愛いとか、そういう冗談は嫌いだから。

そばかすだらけのこの顔のいたいどこが可愛いって言うんだろう。髪は赤毛で、しかもかなりのくせつ毛。体型だって子供みたいなのに。

「入れてくれない？ 朝ごはんまでしょ」

あたしは素っ気なく行った。

どうしてこんなやつ、好きになっちゃったんだろう。なんにも悪魔を好きにならなくてもいいのに。

こんなにきれいな悪魔とあたしじゃ、絶対に釣りあわない。そう思うのに。

「すみません、いつもいつも」

あたしの作った野草とキノコの炒めものをつつきながら、悪魔は頭を下げた。

「いいわよ。仕事なもの」

悪魔の向かいで、同じものを口に運びながらあたしは答えた。

そう、これは仕事。そういう口実がなかったら、あたしは悪魔のそばにいられない。

悪魔は村の人々に嫌われている。もう百年以上も今と変わらない姿でいるらしいし、不思議な力をつかったりするらしいから。

らしい、なんて曖昧な表現をするのは、誰も本当のことを知らないからだ。ずっと昔からここに誰かが住んでいるのは本当だけど、それが彼だったかはわからない。魔法を使っているところを見た人もない。

とにかく、みんな悪魔を気味悪がっている。でも、悪魔があたしたちを助けてくれるものだから、みんなは悪魔がずっとここにいてくれたらと思っている。

そこで選ばれるのが生贄。別に悪魔が人間を食べるわけじゃない。悪魔の世話をする娘（悪魔は男だから、若い娘がいいだろうとみんな思っている）を生贄と呼んでいるだけだ。

物心つく前に両親を疫病で亡くしたあたしは、育ててやった恩を返せとか言われて、生贄にさせられた。まあ、別に大変な仕事でもないし、悪魔にも会えるし、あたしはなかなか楽しんでいる。

「そういえば、ここに来る途中になにか見ませんでしたか？」

不意に悪魔が言った。

「なにかって？ 木なら六十二本あったわ」

「違います、生きものです。なにか動くものを見ませんでしたか？」

「別になにも。どうしてそんなこと聞くの？」

「昨日の夜、散歩したらウロコを拾いましたね」

「ウロコ？ この辺でウロコなんて、変ね」

「でしょう。多分、魔物のものだと思います。危険ですから、気をつけてください。村の方々にもそう伝えてくださいね」

悪魔はとても博識だ。魔物のこともよく知っている。

「どう気をつけたらいいの」

魔物、というのは、不思議な力を持った生物だ。たくさん種類がいるらしい。個体数自体は多くない。けれど、とても強いから、あたしたち普通の人間には太刀打ちできない。

「夜、出歩くのはひかえてください。昼間でも、外に出るときは錆びた鉄を持つように。窓や戸口にも錆びた鉄をつるしておくといいでしょう」

「錆びてればなんでもいいの？」

「ええ。古い鍋でも農具でも、本当になんでもかまいません。リヴィエーヌさん、帰りは送っていきますね」

ずり落ちためがねを上げながら、悪魔はくちびるの両端をつり上

げた。

掃除は苦手。でも悪魔はあたしよりもつと苦手に違いないと思う。小屋には、ベッドとテーブルしか家具はない。衣装箱だって小さいのがひとつきり。悪魔はいつも同じ服を着ている。

それなのに、毎日、天文学的な散らかりようだというのはどういうわけだろう。

本日、小屋の中は大量の木屑でデコレーションされていた。きれいなのはテーブルの上くらいだ。

「あたし、昨日も掃除した気がするわ。どうということよ、この散らかり方は」

ちよこんといすに腰かけてあたしがほうきを動かす様子を眺めている悪魔に、大きな声で言ってやる。仕事だって言ったって、こうも毎日だと、いい加減いやになってくる。

「ちよつと木を削ってたら、いつのまにかこうなっちゃってたんです。こういうのも、居心地がいいと思うんですけど」

「あーのーねー！ ものごとはは限度つてものがあるのよ！」

「はあ……すいません」

「悪いと思うなら手伝ってよ」

「あ、はい、なにやったらいいですか」

「そこに座ってて！ これ以上仕事を増やさないでちょうだい」

ほうきを悪魔に突きつける。

悪魔は掃除がとんでもなく下手だ。やらせると、どういうわけかはじめてときの二倍は部屋を散らかす。

「でもさつき手伝って……」

「言葉のあやよ」

ほうきを持ったまま、あたしは身体をそらした。ずっと同じかっこうをしていると、身体が痛くなってしまふ。

と、そのとき、せわしないノックの音がした。

悪魔が許可するより早くドアが開く。誰かが駆け込んできた。入ってきたのは、男、だった。腹の突き出た、赤ら顔の男。ラディーさんだ。

「どうかなさいましたか？」

悪魔はあたしに目配せしつつ、ラディーさんに優しく訊ねた。

あたしは汲み置きの水をコップに移して、ラディーさんに出した。ラディーさんはそれを受け取ると、息もつかずに飲み干す。

「息子が……昨日から帰らねんだ」

いくぶん落ち着いた様子で、ラディーさんが言った。

「昨日から？ どうして昨日のうちに探さなかったのよ」

「……リヴィエーヌさん」

悪魔がとがめるような声を出す。あたしは舌を出して、黙った。

「夕食の時間には間違いないんだ」

「そうですか……つまりは、そのあとでいなくなったんですね」

悪魔はため息をついた。首を振って、続ける。

「探しに行きましょう。急がないと、間にあわなくなります」

先頭を歩いている悪魔は、小屋を出てから一度も振り返らない。怒っているらしい。あたしが勝手についてきたものだから。

悪魔は危険だと言った。けれどもあたしはついてきた。そうしたかったから。ラディーさんがよくてあたしはだめだなんて、不公平だと思う。

悪魔は森の奥へ行こうとしているようだった。木々の密度は次第に高くなっていく。

あたしは木の根につまずいた。悪魔がさつと手を出して、あたしを抱きとめる。

「気をつけてください」

上から声がする。少し不機嫌でそれなのに甘い声。まさに悪魔のささやき。

「……ええ」

悪魔の手を借りて立ち上がり、今度は慎重に歩き出す。ラディーさんはなにも言わない。冗談の好きな人なのに。

ラディーさんの顔面は、死んだ人みたいに強ばっている。

獣道が途絶えた。下草は膝の高さになっている。

「ねえ、子供がこんな奥にいるの？」

あたしはひっそりと訊ねた。

「多分」

それきり、悪魔はなにも言わなくなった。

悪魔の横顔はいつになく真剣だ。不謹慎だとわかっていても、あたしは見とれてしまう。

薄い光が悪魔に翳りをまとわせている。あたしはそれに見とれてるんだろう。

と、悪魔が足を止めた。

「どうしたんだ」

ラディーさんが言った。

「危険です。動かないでください」

懐から銀色の薄刃のナイフを出して構え、悪魔が言う。

しげみが音をたてた。悪魔はそこを凝視している。

なにがはじまるんだろう。あたしは悪魔を見つめた。悪魔の方は細かく震えている。緊張しているのかもしれない。

枝葉をかきわけて子供が出てきた。小さな男の子だ。小さくて丸っこい。服も髪も泥や木の葉で汚れている。全然ラディーさんには似ていないけれど、間違いなくラディーさんの実子だ。

「なんだ……子供じゃな……」

言いかけたあたしをさえぎるように、悪魔の手が動いた。

次の瞬間、男の子は倒れていた。赤黒い液体が広がる。

「……！　なにするのよ！」

あたしは食ってかかった。だって見てしまったのだ。男の子の胸に刺さった、銀色のナイフ。

けれども悪魔が答えるより早く、ラディーさんが悪魔を殴りつけていた。

「おまえなんかを信用したのが間違いだった……ふざけるな……！」
悪魔は抵抗しなかった。ラディーさんのこぶしが何度も悪魔にぶつけられる。

悪魔のくちびるの端が切れる。紫がかった血が彩りを添える。

悪魔はあたしたちと違うんだ。あたしは思う。

気がすんだのか、ラディーさんは大人しくなった。こぶしを震わせながら、底冷えのする目で悪魔を見下ろしている。

悪魔もラディーさんを見上げているふたりの視線はぴたりとあつたままだ。

先に目をそらしたのはラディーさんだった。血だまりの中の子供に歩み寄ろうとする。

「近寄らないでください」

悪魔が鋭く言った。

「なんでだ」

「危険です。息子さんはもう亡くなっています。指示に従ってください」

ラディーさんは悪魔と子供に、交互に視線をすべらせた。そして、意を決したようにうなずくと、あたしたちに背を向けた。

「……ありがとうございます」

悪魔が声をかける。ラディーさんは答えなかった。

しばらくしてから、悪魔は立ち上がった。あたしは今さら怒る気にもなれなくて、ただ悪魔を見ていた。

悪魔が子供に向かって手をかざした。子供の身体が燃え上がる。

「なにを……」

叫ぼうとして、あたしは息をのんだ。子供の身体が、炎の中で変化していく。

やわらかそうな皮膚は溶け、その下から人のてのひらほどもあるウロコに覆われた肌が表れる。子供らしいぷくぷくした肢体は、四足の獣のそれに変わる。

顔も人のものではなくなった。目は蛇に似ている。鼻は小さなふたつの穴が並んでいるだけだ。半開きの口からは乱杭歯がのぞいている。

そんな異形の姿も、焼かれ、消えていく。あたしは目をそらせなかった。

「……どういふことなの？」

「こいつが、子供に化けていたんです。子供は、もう……」

悪魔の声は暗く沈んでいる。

あたしは、動こうとしない首を必死にまわして、悪魔の方を向いた。

悪魔は静かに泣いていた。静かに涙を流していた。

悪魔はきつと、とても優しい。だからあたしは悪魔が好きだ。けれども悪魔が優しいなんて、多分誰も知らない。

あたしは視線をそらした。異形のことを焼く炎は、ほかには移らず、燃え続けている。細い煙が空へとたなびいている。

「ラディーさんにも説明すればよかったんだわ」

小屋に戻ってきて、悪魔に温かいスープを出してやってから、あたしは言った。

「でも、ラディーさんの目の前で、子供と同じものを殺したのは事実です。彼の怒りは正当でしょう」

悪魔は憔悴しているようだ。あたしはこっそりため息をついた。

「そうかもしれないけど……」

納得がいかない。あの子供を殺したのは悪魔じゃない。それなのに、どうして悪魔が罵られなければいけないんだろう。あたしにはわからない。

「優しすぎるわ。どうしてそうまでしてあたしたちなんかに関わるの？　ここにいたって、虐げられるだけじゃない」

「誓ったんです。ずっと昔。だからですよ」

悪魔は話したがっているんだろうか。いつもとは違った意味で、悪魔は饒舌だった。

「なにか、あつたの？」

「おもしろくもない話ですよ」

「つまらなくはないと思うわ。もしよかったら聞かせてくれる？」

これは古傷をえぐることなのかもしれない。明るく訊ねながらあたしは思った。

でも、知りたい。あたしはなににも知らない。だから知りたい、そう思う。

「――昔、ね。人間に恋をしたんです。彼女はこの村の巫女でした。彼女はこの村を愛していましたので、ぼくは、彼女のためにこの村を守ると誓ったんです。ね、つまらない話でしょう？」

悪魔は苦笑した。

「わざわざ昔って言うってことは、相当古い話でしょ？　そんな古い誓いを、未だに守ってるなんて、律儀なのね」

空気が重い。あたしは茶化した。

「ぼくたちにとって、誓いは絶対なんです」

「へえ……。じゃあ、簡単に愛の言葉なんかささやけないわね」

「大丈夫ですよ、ぼくたちは生涯をひとりの相手と添い遂げるんです」

「相手は、その巫女さん？」

「いえ。彼女は巫女でしたから……」

悪魔の双眸に悲しげな翳りがよぎる。少し立ち入りすぎたかもし

れない。

「——ごめんね、やなこと思い出させちゃって」

「お気になさらず。本当にいやなら言いませんから」

悪魔が切ない顔をしたのは、ほんの一瞬のこと。すぐにいつも通りの微笑が浮かぶ。

でもその笑みを切なく思ってしまうのは、いったいどうしてなんだろう。

「自分で聞いておいてなんだけど、どうしてそんなこと教えてくれるの？」

あたしはぼそぼそ言った。それって、好意の証だろうか。

「あの人に似ているんです。雰囲気とか、そういうものが」

悪魔は目を細めた。その楽しい表情に、あたしは嫉妬してしまう。

きつと、今、悪魔が思い浮かべているのは、昔好きだった人の面影。しかも思い出させるきっかけになったのはあたしだ。

「そう。あたし、今日はもう帰るね」

今のあたしはとんでもなくぶさいくに違いない。あたしは下を向いて立ち上がった。

「送って行きましょう。少し待っていてください」

悪魔は何事もなかったかのように言った。足音もたてずに衣装箱まで歩いていく。

最悪、だ。心の中で唾液を吐き捨てる。

あたしは“彼女”に似ているという。なんてことだろう。

思い出はいつもきれいだ。でもあたしは、年を取れば今以上にきれいでなくなっていく。

きれいになっていく、“彼女”。

きれいでなくなっていく、あたし。

勝ち目なんてあるはずがない。あたしを見るたび、悪魔は“彼女”を思い出さだろう。

それも仕方ないのかもしれない。だってあたしは恋をしている。

村の外れに住む悪魔に。

人ではないとわかっていても、あたしは彼を好きだと思う。

古ぼけた黒い外套を着込んだ悪魔が、あたしの手を取った。あたしは微笑んで見せる。

そうして、歩きはじめながら、あたしは心の中で呼んでみるのだ。

今までに一度も呼んだことのない名を。悪魔の、名を。

キリエ、と。

今はまだこれでいい。悪魔に一番近いのは、あたしだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818c/>

村の外れに住む悪魔

2010年10月8日14時30分発行